O1-005

医療的ケア児を受け入れる保育所が担う役割の具体化に向けた取り組み

徳永 奈津子[1]、本田 順子[2]

[1] 兵庫県立大学看護学研究科
[2] 兵庫県立大学

【背景】
「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」において、医療的ケア児を保育所で受け入れることは設置主体の責務と定められたが、実際の受け入れには「看護師の確保」「施設設備」「関係機関との連携」などの課題があり、順調に進んでいる状況ではない。「関係機関との連携」がうまくいかない要因の一つに「役割のあいまいさ」があげられる。そこで、本研究では保育担当職員(保育士、保健師）を対象とし、医療的ケア児の受け入れる保育所の役割を明らかにするためのプロジェクトを実施した。

【方法】
既に医療的ケア児の受け入れしている他市へ保育所の役割に関するヒアリングを行い、その結果を参考に本プロジェクトを構成した。本プロジェクトは、医療的ケア児の基礎的な講義と保育所の役割を検討するグループワークから構成され、計３回実施した。本プロジェクトの参加者はＡ市公立保育所からリクルートした。参加者には、書面と口頭で研究の主旨・目的・方法、倫理的配慮について説明し、同意書にて同意を得た。なお、所属機関の研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】
12 名の保育士、１名の保健師が参加した。結果、医療的ケア児を受け入れる保育所の役割は、４つの対象「子ども本人」「家族」「他児」「地域」に分けられた。「子ども本人」に対しては、【安全な経験を保障し、成長を促す】【仲間づくりの場となる】【生活習慣の獲得を手助けする】【居場所の一つとなる】が挙げられた。「家族」に対しては、【保護者の孤立を防ぐ】【保護者が安心できる場所となる】【保護者の視野を拡げる】【保護者自身の時間を保障する】が挙げられた。さらに「他児」に対しては、【色々な人がいることを当たり前に感じられるようにする】【お互いを理解し、認め合えるようにする】が挙げられ、「地域」に対しては、【保育所の活動を通して地域の人へ医療的ケア児について知ってもらう】【関係機関へつなぎ、連携する】【入所以外の活動でも受け皿となる】が挙げられた。

【考察】
本プロジェクトの限界として、時間的制約がある中で参加者たちが自身で導き出した結果であること、また医療的ケア児を実際受け入れていない状況での取り組みであったことから十分な具体化に至らなかったことが挙げられるが、先行研究でもみられない「保育所の役割」を明らかにしたことは、「役割のあいまいさ」解消の足掛かりとなったと考える。

O1-006

産後ケアにおけるバイオサイコソーシャルの視点

松本 光子[1]、丹澤 享子[1]、高橋 瑠衣[1]、小島 久美子[1]、並木 由美[1]、山田 摩耶[1]
内田 里保子[1]、内木 由紀[1]、江口 由紀[1]
橋口 良恵[1]、立石 幸[1]、三島 香[1]、秋山 千枝子[2]

[1] 医療法人千実会ママ＆ベビーあきやま
[2] 医療法人千実会あきやま子どもクリニック

【目的】
国民運動である健やか親子 21（第２次）の基盤課題「切れ目ない妊産婦乳幼児への保健対策」で展開される支援を、産後ケアから切れ目なく継続させるためには、同じ視点で支援していく必要がある。成育基本法ではバイオサイコソーシャルの視点が述べられており、産後ケアにおいても、適切な母子への切れ目のない支援を実施するため、バイオサイコソーシャルの視点での分析を試みた。

【方法】
令和４年１月から 12 月までに、当産後ケア施設を利用した０～５か月の子どもを持つ母親の実人数 248 名、延べ人数 878 名を対象とした。産後ケア施設で母より聞き取った利用目的、相談等をバイオサイコソーシャルの視点として、身体面は①体調②授乳相談③子どもの体重管理④母乳相談⑤産後の身体の変化、心理面は⑥メンタル⑦休息、社会面は⑧育児⑨兄弟の問題⑩家族の問題 に分類した。

【結果】
産後ケアでの利用目的や相談で多い項目は、どの月齢においても心理面の「休息」が最も多く、次いで「授乳相談」「育児相談」「母乳相談」であった。全体的に身体面が多く、その身体面の「体調」には疲労感、高血圧、貧血があり、「授乳相談」には哺乳量、授乳間隔、「母乳相談」には直接母乳の方法、乳房トラブル、「子どもの体重管理」が含まれていた。心理面では「休息」の他「メンタル」では産後うつ、一人の育児が不安、相談相手がいないなどがふくまれていた。社会面では「育児相談」には泣きへの対応、沐浴の仕方、寝かせつけ方、兄弟の赤ちゃん返り、コロナ禍で当園自粛での兄弟の対応などがあり、「家族の問題」には夫のメンタル、姑との関係、ワンオペ等の家庭環境などが含まれていた。

【考察】
出産直後の母体は大きく変化しているため、施設内でのケアは休息に次いで、乳房管理、子どもの体重管理など身体面のケアの比重が大きく占めている。しかし、産後ケアの長い利用時間を活用してバイオサイコソーシャルの視点を用いてすべての産婦をとらえると、産婦のメンタル、意欲や能力、児の様子、家庭環境等広い視点を持つことが可能であることが分かった。そして、バイオサイコソーシャルの視点で得られた情報を小児診療や保健センターなど地域の関係機関と共有し支援につないでいくことが重要と考えられた。

Presented by Medical*Online